オモシロがり屋のサーカス合宿

Social Circus workshop with HNL Kids

交換留藝 2021
オモシロがり屋のサーカス合宿
プロジェクト報告集

Social Circus Workshop with HNL Kids
portfolio

2022 年 7 月 20 日　初版第 1 稿発行

発行＝ほっちのロッヂの文化企画
企画・文・編集＝唐川恵美子
デザイン＝山田志穂

滞在制作＝金井ケイスケ、鈴木彩華
企画協力＝認定 NPO 法人スローレーベル
運営協力＝学校法人風越学園

医療法人社団オレンジ　ほっちのロッヂ
軽井沢キッズケアラボ

〒389-0113
長野県北佐久郡軽井沢町発地 1274-113
TEL：0267-31-5519　FAX：0267-31-5616
Email：info@hotch-l.com
WEB：https://hotch-l.com

交換留藝（こうかんりゅうげい）とは

長野県軽井沢町にある「診療所と大きな台所のあるところ ほっちのロッヂ」で行う滞在制作プロジェクトの総称です。外国へ行き、その土地で出会う人たちと学びを与え合う交換留学のように、アーティストがケアの現場に身を置くことで、お互いの持つ「藝」を交換し、アーティスト自身にとっても、ケアの現場で活動するほっちのロッヂのメンバーにとっても、学び合いとなることを目指しています。

Artist in Clinic:

This is an Artist-in-Residence-like program at a “clinic-like” place called Hotch no Lodge in Karuizawa Town, one of the most beautiful forest towns in Japan. Hotch no Lodge is located in an old residential district in Karuizawa Town and is providing home visit medical / nursing care services, day care services for the elderly and children with special needs, and sick child care services. We hope that this project will help those artists seeking new creative chances to find and exchange ideas through communication with our medical / care staff, and to share the whole idea of caring as a living culture.

オモシロがり屋のサーカス合宿とは

ほっちのロッヂに関わりのある子どもたちが、サーカスアーティストの金井ケイスケ、鈴木彩華とともに創り上げるサーカスワークショップ。使い手によってさまざまな用途が広がるサーカス道具を使いながら、年齢、性別、障がいの有無、言語の違いを超えて、お互いの能力や発想をオモシロがりながら、既知のものと未知のものがまざりあう場づくりを目指しました。

Social Circus Workshop Project with Hotch no Lodge’s Kids

In this project, we made a circus workshop with children attending Hotch no Lodge including those with special medical needs, in order to find out the way to encounter others beyond age, gender, abilities, or languages in fantastic cooperation with world-wide circus artist Keisuke KANAI and a promising dancer Ayaka SUZUKI from Social Circus, renowned as the producing / performing members of the Tokyo Olympics 2020 opening / closing ceremony.

SLOW CIRCUSとは

サーカス技術の練習や習得を通じて協調性・問題解決能力・自尊心・コミュニケーション力などを総合的に育むソーシャルサーカス。世界各地で貧困・難民・虐待などに起因するマイノリティのエンパワメントに活用されています。

SLOW CIRCUSでは2017年よりシルク・ドゥ・ソレイユのサポートを受け、イタリア・アジア・南米など世界各地でソーシャルサーカスを実践する団体と連携しながら、多分野の専門家と共にプログラムを開発。中学校や障害者福祉施設、子育て世代や次世代ビジネスリーダー向けなど多方面でのプログラム実践や、障害のある人とのパフォーマンス創作、トレーニングなどに取り組んでいます。

Slow Circus promotes the Social Circus run by non-profit organization SLOW LABEL. Since 2017, they have developed a program for Japanese social issues with the support of Cirque du Monde / Cirque du Soleil. They provide a training program for team building and diversity management to educational institutions, welfare facilities, local communities and business persons.

Artist profile

金井ケイスケ

サーカスアーティスト
SLOW CIRCUSディレクター

Keisuke KANAI/
Circus Artist , Director of SLOW CIRCUS

中学生で大道芸を始める。文化庁国内研修員として能を学んだ後、文化庁海外派遣研修員として、日本人で初めてフランス国立サーカス大（CNAC）へ留学。卒業後フィリップ・デュクフレ演出のサーカス作品でヨーロッパツアー後、フランス現代サーカスカンパニーを立ち上げ世界35カ国で公演。2009年帰国。2015年よりSLOW LABELパフォーミングディレクター。東京2020パラリンピック開会式サーカス振付。

鈴木彩華

ダンサー
SLOW LABELアカンパニスト

Ayaka SUZUKI/
Dancer, SLOW LABEL Accompanist

東京都出身。上智大学卒業後、英国 Trinity Laban Conservatoire of Music and Dance で子ども・高齢者・障害者など幅広い層を対象にしたコミュニティダンスと呼ばれる身体表現の手法を学ぶ（準修士）かたわら、幼児対象のダンスクラスのアシスタントを務めた。帰国後はSLOW LABELでアカンパニストや演出助手として携わるほか、コンテンポラリーダンス作品への出演や自身での創作・公演活動を行う。

Schedule

2022年初め / Beginning of the Year, 2022

Jan.14	打ち合わせ① / Project started
Jan.20	リサーチ① / Research visit I
Feb.12	リサーチ② / Research visit II
Mar.2	リサーチ③（オンライン） / Online Research III
Mar.19	ジャグリング体験教室 / Juggling Open Class
	打ち合わせ② / Meeting
Mar.20	サーカスワークショップ / Circus workshop with HNL kids
Apr.12	フィードバック、プロジェクト終了 / Project closed

1回目リサーチ

2回目リサーチ

3回目リサーチ

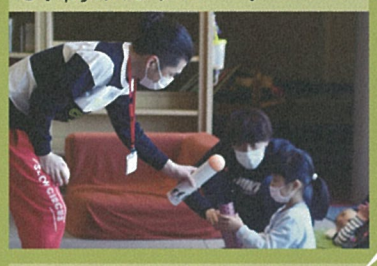
ジャグリング体験

workshop
プログラム

1. ストレッチ〜自己紹介

2. フローリング

3. 筒けんリレー！



4. 道具紹介

5. ジャグリング体験

6. エンディング

comment

もう少し皆が積極的に参加しやすいような仕組みを作っておけばよかったなあ。ソファーがステージの周りに置いてあったから、落ち着いちゃったかも。

私は思ったより「見学モード」の大人が多いなと思いました。大人も積極的に動いて、楽しく参加できる仕掛けがあるともっと良かったかな。

パフォーマーと観客という感じになってしまったね。

家族ごとにまとまっていたので、安心して参加できた人もいたと思います。ロッヂキッズがあれだけ勢ぞろいしたのは初めてに近いので、初対面だった人同士も多くて、緊張感があったかも。（唐川）

・・・

家族に関係なく、大人と子どもたちを混ぜこぜにしてチームにしたのは良かったな。「この辺から流れを変えられそう」ってちょっと思った。

・・・

道具を実際に使って見せたことで、「この人たち、一応プロなのかな？」「あの道具、面白そう」みたいな興味が出てきて、距離感が縮まったように感じました。いい感じで休憩にもなりました。

ジャグリングって、パフォーマンスを見るだけでもすごくアクティブになれる気がします。技が成功するかどうか、演者と同じ気持ちになって見ている。たまに自分が参加することもありますし。（唐川）

そうですね。「自分がアシスタントにさせられちゃったらどうしよう」みたいな、ハラハラ感がありますよね（笑）。

・・・

後半、大人も子どもも皿回しやボールで本気で遊び始めると、場が共有できている感じでした。

そうそう！同時多発的に色んな所で色んなことが起こっていって。

・・・

最後それぞれ気に入った道具で一芸を披露してもらったのですが、ちょっと恥ずかしがりながらも、お互いを楽しませる意識が垣間見えて良かったですね。

皆が楽しんでいる一体感が広がっていましたよね。寝たきりの子がいると、比較的ゆったりした時間が流れるイメージがあるのですが、それが覆ったような印象があります。アクティブで元気な雰囲気。

混ぜる、混ざる、その面白さは？

話し手

金井ケイスケ（サーカスアーティスト・右下）
鈴木彩華（ダンサー・左上）
塚原沙和（SLOW LABEL・左下）
唐川恵美子（ほっちのロッヂ・右上）

金井　ワークショップ前日（3/19）にやったジャグリング体験。そこに参加した子たちと、ワークショップに参加した子たち、もっと混ぜたいですよね。

鈴木　皆それぞれで遊んでいる、ああいう感じだったら、障がいのある・なしに関わらず一緒に過ごせるんじゃないかなと思いましたね。

唐川　そうですよね。そこにある道具でどうやったら一緒に遊べるかを子どもたち同士で考えてもらえば、すごくクリエイティブな体験になると思います。

金井　ただ、福祉施設では「事故を起こしてはいけない」という意識がすごく強いから、「骨が折れてしまうような動かし方はやめてください」「体が弱いので、あまり激しい運動は難しいです」というような説明から入りがちなんですよね。事情はものすごく分かるんですが、それだと体験の幅が広がりにくい。

▼どこでもお出かけするほっちのロッヂのキッズたち

唐川　リスクを減らそうと思うと活動量も減ってしまいますよね。ほっちのロッヂの子どもたちは普段から意識的に色んな遊びをしているので、遊び慣れているかもしれません。例えば雪が降ったらそりで遊ぶ、夏は水遊びをするなど。子どもだったら当たり前の遊びなのに、呼吸器をつけているとちょっと心配になって控えてしまいそうになるところを、あえてする。

金井　いいですね。リスクばかり考えてしまうと、挑戦の幅や好きなことを広げるチャンスが狭まってしまう気がします。スローレーベルの活動にはアクセスコーディネーターという役割があって、障がいのある人が何かに挑戦し続けるサポートをしています。

塚原　そうなんです。スローレーベルでは、必要な時はアクセスコーディネーターが現場にいて、それぞれの参加者ができそうな活動範囲や事故リスクを把握しています。でも、リスクすべてをファシリテーターには伝えずに、基本的には自由にやりながら、危ないと思ったら助言します。あらかじめリスクを教えてしまうと、アーティストが萎縮してパフォーマンスとして良いものができなくなってしまうんですよね。

鈴木　そうですね。最初に（リスクを）言われると「あんまり危険なことはさせられないな！」と思ってしまう。

唐川　この企画を始める時、スタッフとも同じようなことを話していました。アーティストを呼んで何かをしようという時、どういうことをやったらいいか、やってはいけないか、参加者のできること、できないこと、などの情報を先に聞いてくれる方が多くて。でも現場のスタッフにとっては、そのアーティストならではのアプローチでまず参加者と関わってみてほしいという思いがあります。そうすれば、ケアの現場では気づけなかった才能や挑戦のきっかけが引き出されることもあると思うので。そんなわけで、今回こちらから提供する子どもたちの情報もなるべく最低限に、「あとは会ってからのお楽しみで」という感じでした（笑）。

アクセスコーディネーターとは

認定 NPO 法人スローレーベルが創り出した人材。障害に限らず、多様な背景の人々が安全に共創するための準備ができる人のこと。2022 年 7 月現在、スローレーベルでは認定制度を開発中。

▼思い思いに道具に触れ、「はじめまして」を体験するキッズたち。

金井　ほっちのロッヂでは診療所との連携もできているし、だからこそ僕らが自由にしていても、問題になるようなことがなかったんですね。畳でゴロゴロしたり、自由な姿勢で入り乱れたり、のびのびと出来る環境は良いですよね。

唐川　そういう意味では、ほっちのロッヂのスタッフたちも、もしかしたらアクセスコーディネーター的な立ち回りをしているのかな、と思います。

今回のワークショップづくりでユニークだったところは？

金井　一発本番ではなく、リサーチする機会が３回あったので、当日のプログラムを組み立てるのに役立ちました。寝たきりの子たちとどうやって関わるかについては不安でしたが、エミリーさんをはじめ、ほっちのロッヂの皆さんがちゃんと迎えてくれる体制があったし、子どもたちだけでなくそのご家族も含めて「何をしたいか」「何ができるか」を一緒に考えてくれたので、とても安心できました。

鈴木　寝たきりの子たちと一緒にワークショップをしたのは初めてだったので、何ができるかを考えることができたのはすごく良かったです。子どもたちが予想だにしない道具の使い方をしてくれたこともあり、私自身の学びになりました。

金井　応用力の幅広さには刺激を受けました。参加した皆さんは僕らのように固定観念がないから、１つの道具でも違う遊び方をしてくれて。「そんな遊び方があったんだ」「それ面白いじゃん！」と、お互いに感じたことをキャッチボールできる関係になれたのが良かったですね。

鈴木　一人一人、身体の状態によって活動量の差が大きいと感じたので、「場を偏りなく盛り上げる」のが私にとっては課題でした。結局は道具の力に支えられましたね。点で固定されている人たちが多い中、道具を使って動きを作ることで点と点が線でつながって、動き出すイメージがあります。

唐川　「偏りなく盛り上げる」って、パフォーマーならではの表現ですね！ケアに関わる人もその心づもりをしていると面白そう。「今日もケアの現場を盛り上げていくぞ！」みたいな（笑）。

金井　皆と過ごしながら、発想や視点も転換させられましたね。寝ながらやってみると「上から何かが降ってきたら面白いかな」などの新しいアイディアが出てきて。

鈴木　皿回しの棒も、誰かがちょっとサポートすれば持てる。そうすると皆がすごく喜んで、本人も得意げになれる。こういうことが可能になるんだなと思いました。

金井　自己表現のきっかけになりますよね。ケアされる対象になってしまうと、遠慮があったり受け身になったりして、どうしても自己表現の機会が少なくなりがちになってしまいますが、誰かが「これをしたい！」と表現して、それをみんなが支えるという状況が、パフォーマンスを通じて自然に生まれていたように思います。

キッズとケアと軽井沢。そのあゆみ

ほっちのロッヂ：紅谷浩之、伊藤順幸、松永恵、唐川恵美子

START!

2011～

福井キッズケアラボ始動

Kids' Care Lab in Fukui

2015～

軽井沢キッズケアラボ始動

Kids' Care Lab in Karuizawa

東京ディズニーランド

Trip to Tokyo Disney Land

久米島旅行

Trip to Kume Island

白山登山

Mt. Hakusan hike

CHALLENGE!

2017

初回気球体験

Air Balloon Ride

2020～

ほっちのロッヂ始動

Hotch no Lodge launched daycare services for kids with special medical needs

GO ON!

家と病院以外の場所へ、キッズたちが混ざっていく。

唐川　福井にあるオレンジキッズケアラボ（通称：ケアラボ）ができるまでの経緯は。

オレンジキッズケアラボ
(carelab.jp)

紅谷　研修医時代、医療的ケア児（*1）と呼ばれる子たちには救急の現場でたまに出会うぐらいでした。その後地域に移ってからも重度障害のある子の主治医になる機会があり、彼らは病院と家しか行く場所がないということに気が付きました。福祉事業所に受け入れを頼むのですが、「医療はちょっと…」と断られてしまう。

代わりに病院の中のレスパイト施設（*2）に行ってみると、動ける子たちは公園に遊びに行ったのに、寝たきりの子は広い部屋にぽつんと寝ていて、小さいテレビがついている。つまり、福祉の視点に寄ると医療が怖くて、医療の視点に寄ると遊びが怖い。ということは、医療ができて暮らしのことを知る人、つまり僕がやろう！と、オレンジホームケアクリニックを立ち上げた翌年、早速ケアラボを立ち上げました。

唐川　医療と福祉でも、見方に違いがあるんですね。

伊藤　目的が違うんですよね。医療では、変化させないのが目的。悪くしてはいけないし、良くもしない。だから、興奮するぐらい面白いことをやって体調を壊しては困るわけです。一方、遊びは「どうしたら楽しいか？」という発想なので、雪の中で３時間遊ぶ。風邪を引いてしまうかもしれない代わりに、活動の幅は広がります。

（*1）医療的ケア児
障害や疾患により、人工呼吸器や胃ろう、たんの吸引等の医療的ケアが日常的に必要な子どもたちのこと。
（*2）レスパイト
一時休止・休息を意味し、介護に関わる人の休息等のため、ケアを必要とする人が短期間入院・宿泊できる制度のこと。

唐川　ケアラボができて11年目。気付いたことや、変わったことは？

紅谷　「子どもたちが成長・発達しないのは病気のせいだ」と皆が思い込んでいたけれど、子どもたちがケアラボで友達と遊んでいると、喋れるようになったり、歩けるようになったりするケースが出てきて。「病気を理由に大人が色々な制限をかけていたから、できることがどんどん減っていったのではないか？」と考えるようになりました。そこで僕は制限するのではなく「GO」と言う医師として、海に行こう、山に行こう、電車や船、飛行機に乗ろう！みたいな感じで活動を広げていきました。

「混ぜる」「混ぜない」を通り越して、包まれている。

紅谷　2015 年、子どもたちが一定期間軽井沢に滞在する「軽井沢キッズケアラボ」を始めた時も、彼らがどこでもズンズン遊びに行くことで、どんどんコミュニティが広がっていきました。僕らが声をかけても難しそうな場所も、呼吸器をつけた子が「ここ入っていいですか？」と言えば、「どうぞ」と当たり前のように受け入れてくれて。次の夏にも「また来たね！」なんて言って迎えてくれるのを見て「この子たちのエネルギーを借りた方が、地域がハッピーになるスピードは速いぞ」と思って。

彼らは弱者とされているけれど、地域を変える力を持っている点でめちゃくちゃ強い。人間としての幅がすごく広いと思います。僕らの幅の中にこの子たちを入れてあげるのが「包摂（インクルージョン）」だと錯覚していたけれど、むしろこの子たちの持っている大きな土俵の中に僕らもいるのかもしれない。だから、この子たちが幸せになる社会を作れば、全員幸せになれるはず。そう思うと、障害のある・ないを「混ぜる」「混ぜない」というのを通り越して、すでに皆が包まれている感覚さえします。

視点と感覚、医療と暮らしが混ざりあうプロセス。

唐川　子どもたちと関わる時、心がけていることはありますか。

松永　表情や仕草をよく見るようにしています。言葉でコミュニケーションがあまり取れないから、まばたきや、ちょっとした指の動きで（何が言いたいのかを）キャッチしていく。子どもたちと関わるようになって、自分の感性も磨かれている感じがします。

紅谷　これ本当ね、難しいんですよ。「こうすればいい」という定式はなくて、プロセスが大事なので。めーちゃん（松永）がこうしているということを聞いて「私もそうすればいいんですね」ということではない。

伊藤　そうそう。

紅谷　ある時、ケアラボに保育士資格を持ったスタッフが入ってきて、「雨だね。雨を浴びに行こう」「雨は冷たいって感じなきゃね」と言い出した。医療者だと、どうしても体調を気にして「今日は雨だから外に出ないでおこう」となりがちなんですけれども。

伊藤　そこで医療と保育の目線が混ざり始めましたね。

紅谷　僕は最初「看護師が保育士っぽくなればいい」と思っていたけれど、保育士と看護師がそれぞれの立場からぶつかり合いながら進めるプロセスの方が健全だなと思うようになりました。その方が、子どもとスタッフの関係に化学反応が増えると思うんです。

異なる視点で空間を共にするからできること

唐川　色んな職種の人がいるほっちのロッヂだからできることは？

松永　私は楽観的に考えがちなので、医療的な目線がちょっと足りないかなと思うことがあります。なので、そばに医療的な目線を持った人がいてくれると、変化の兆しをキャッチしてくれるので、安心できますね。

紅谷　なるほどね。ただ、医療があれば安心というメリットを強調しすぎると「ここは病院の隣にあるから、こういう子どもたちが通えるんですね」と思われて、子どもたちが地域に出て行ける可能性が遠のくかもしれない。

松永　確かに…。

伊藤　医療だから安心ではなく、色んな視点から皆がドキドキしながら挑戦を見守っている、という状態が安心なのかもしれない。

紅谷　ほっちのロッヂでは、医療の現場と子どもたちの時間が共存しているじゃないですか。これは結構しんどいと思うんですよ。子どもたちの時間って、医療の分刻みの時間感覚からすると、とってもゆるやか。「誰々ちゃん診てほしいんです」と言われて待っていたら「今おむつ変えてます！」とさらに待たされる。そのうちに「お味噌汁でもどうですか？」と味噌汁をすする（笑）。

昔よくあった、のれんの向こうは家で、手前で八百屋をやっているみたいな、暮らしと商売が一緒に流れている空間。割り切ろうと思っても割り切れない違和感が常にあるからこそ、お互いの視点を話すきっかけも生まれる気がします。

ほっちのロッヂ　診療所と大きな台所のあるところ。長野県軽井沢町を拠点に、2019 年９月より訪問看護ステーション、2020年より診療所、病児保育、通所介護などのケア事業を順次スタート。「症状や状態、年齢じゃなくて 好きなことをする仲間として 出会おう」を合言葉に、ケア以外の入り口からも町の人たちとつながり、町全体の健康を考える活動を展開している。

・・・

紅谷浩之…ほっちのロッヂ共同代表。医師。
伊藤順幸…ほっちのロッヂのなんでも屋。保育士・介護士。
松永恵…子どもとあそぶ理学療法士。
唐川恵美子…ほっちのロッヂの文化企画担当。